

国際規格と非規格三原則

小瀬 輝次

東京大学生産技術研究所第1部 〒106 東京都港区六本木7-22-1

最近ソニーが3.5インチマイクロフロッピーディスクを13社で規格化したと報ぜられた。これは昨年4月の日立、松下グループが3インチのそれを規格化したのに対抗したものだそうである。またVTRではVHS方式がベーター方式より優位に立つだろうと新日電のVHS方式採用に際して報じられている。

規格を武器にした企業のテリトリ争奪戦を見ていると戦国時代の群勇を想像する。誰かが天下統一を果たさなければ戦いは終わらない。当事者にとっては喰うか喰われるかであるから必死になるのは同情できるが、これでは良民すなわちユーザーはたまったものではない。

ISO (International Organization for Standardization; 国際規格化機構) のTC 42 (写真) の仕事を手伝って5年になる。ISOはヨーロッパが中心であるが、その目的はあくまでもユーザーのためで、各国の業界代表である委員はできるだけ妥協ということで規格をまとめている。成熟した大人の感覚である。ヨーロッパでもかつては今日の日本のような壮絶な企業戦があったのかもしれない。

昨年(昭和57年)のサマーセミナーで私は規格に対する日本の対応は非規格三原則——規格は作らず、持たず、持ち込ませず——があるようであると話した。

日本では自由な企業活動を縛るのが規格であるという潜在意識があってISOの活動に対しても消極的であり閉鎖的である。自由の要求は裏をかえすと上記の戦国時代の再現を許容していることである。実際VTRなど日本が世界のトップレベルにある商品に規格化できず競争しているという現象があらわれている。もっとも規格に限らず表現の自由、貿易の自由、すべて自分の都合だけで、ということはわが身に降りかかると猛反対するのであるが、やたら自由を振りかざす日本の風潮と軌を一にしている。

元来日本には規格の概念がなかったのではないだろう

か。その証拠に明治以前には度量衡はあってもその基準はなかった。それでなんとなく事がすんでいたのだから平和なのんびりした島国であったというべきであろう。升酒のふちからこぼれるのを見てオトトト……というのと、コップに筋が切ってあってビールやワインをきっちりその筋まで注ぐというドイツと国民性の差はたしかにある。国旗の日の丸の赤は日の出の太陽の色といわれるが朝日と夕日とどう違うのか? CIE色度座標で正確に規格化すべきであると東大名誉教授の日置隆一先生はかねてから唱えておられるが、未だに何処からもこれを決めようという気配はない。世界には決めずにはおられない国民性の国もあるわけである。問題はこのような国民性が何によって培われたのかであるが、これは民族学や社会学の専門家の手をわずらわすことにして、サマーセミナーでは日本は規格音痴であるから先進工業国の仲間入りしても先頭を走らず2番手くらいについて走るのが世界人類のためであろうと述べておいた。

人類は数千年の間、さっぱり進歩していないのだから将来を予測するには歴史を調べればよい。その行動が予測できるという人もいる。歴史に学べといいながら同じ轍を踏むのが人間なのかもしれない。技術予測などにもこの手法が——すなわち歴史はくり返す——を利用して次の技術革新は1990年代に現われるという人もいる。すると日本人の性格は未来永劫今までどおりで規格音痴ということになって救いはないが、しかし本質は変わらなくても自分の欠点をよく知れば気配りでこれをカバーすることもできる。これが知恵というものであろう。

今の日本は第二次大戦前のように世界からの孤立化が心配されている。これを防ぐにはこの知恵しかないようである。ISOの場はわれわれにとってたんに規格を考えるというのではなくカルチャー摩擦の場でもあるといえる。